

松会の宗教史・民俗史：近世における神仏習合的祭礼の実像と近代における修験霊山の表象

山口, 正博

<https://hdl.handle.net/2324/1455994>

出版情報：九州大学, 2014, 博士（人間環境学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

論文審査等の結果の要旨及びその担当者

<p>(ふりがな) 氏名</p>	<p>やま ぐち まさ ひろ 山 口 正 博</p>
<p>論文審査の結果の要旨</p>	<p>別紙のとおり</p>
<p>論文調査委員</p>	<p>主査 九州大学 教授 關 一 敏 副査 九州大学 准教授 飯 嶋 秀 治 副査 九州大学 教授 服 部 英 雄 副査 駒澤大学 名誉教授 長 野 覺</p>
<p>試験又は学力確認の結果の要旨</p>	<p>九州大学大学院人間環境学府の最終試験に合格した。</p>
<p>論文審査学府教授会等の名称と組織</p>	<p>名 称 九州大学大学院人間環境学府教授会 組 織 構成員 77人</p>
<p>判定方法</p>	<p>人間環境学府教授会における無記名投票による。 出席者 59名、 可票 59票、 否票 0票</p>

論文審査の結果の要旨

本論文は、松会行事を軸に英彦修験が近世から近代にかけていかなる形態的変容を被り、どのような意味布置の転換を経験してきたかを、実証的かつ方法的に記述した論考である。近代以前の修験寺院の実態は第一部「英彦山修験道の宗教史・民俗史」に、近代以降に英彦山修験道の解体と再文脈化されていく史的変遷は第二部「北部九州における修験道の近代」にそれぞれ詳述される。そのさい松会の構成要素とその系譜、松会成立のテコとしての柱松儀礼の展開、松会の近隣山系への伝播経路、これを担う山内組織と当役の仕組み、中心行事としての柱松・御田祭の実践と世界観、等々の近世的展開を資史料の博搜によって丹念にえがいたうえで、山伏相互の知識の階層性や、民衆からみた英彦山像の復元といった方法的な試行をかさねている。加えて日本百景の選出や国定公園指定にみられる近代の山岳表象や、身体訓練としての修験像の見直し等の近代の過程のなかに、今日のいわゆる修験道研究や民俗学的理解の発生を位置づけることで、その歴史的限界と可能性を明らかにしている。史料の実証性と民俗調査による実証性とを兼ね備えた、良質の宗教史・民俗史的作品であり、新たな学問的知見を提起しえた果敢な学問的試みといえることができる。よって本論文は博士（人間環境学）の学位に価するものと認める。